

佐伯地方の姓氏(十三)

甲斐氏と戸高(戸坂)氏

佐 脇 貫 一

(会員・佐伯市長良)

◇ 佐伯藩の歌人甲斐鶴寸

鶴藩略史下巻の天保十一年(一八四〇)十一月十一日の条に

徒士甲斐英貞が卒した。人となり善く書き和歌を歌った。嘗て大阪に勤務していたとき、中山光実の詠歌の客と会った時、山を以て題とした。英貞之に和して

暗き闇雲か雪かと問はぬ間に

梅と答へて香ふ春風

と詠じた。光実歎賞し、別に歌二首を書き禁中に捧げたと称す。
とある。

〔註〕 鶴藩略史は南豊平山小文治編著、増村隆也訳述、昭和二十三年九月上巻出版。その後上梓の機な

く、昭和四十二年一月増村訳述の稿本(下巻)を佐伯史談に連載した。

増村隆也著『佐伯郷土史』下巻には「幕末時代の人」の項に、甲斐英貞を紹介して

徒士甲斐英貞は弥七郎と称し、松廼舎鶴寸(まつこのやかすん)と号した。人となり書及び和歌を善くし、嘗て大阪藩邸に勤めていた時、中納言外山光実がその同人と山と題して歌を詠んだ時、英貞は

くらきやみ くもかゆきかたとわぬまに

むめとこたえて にはうはるかぜ

と詠み、光実は歎賞し之を朝廷に捧げたと云う。
と記述している。

甲斐英貞は佐伯藩士ではあるが、徒士格で決して身分の高い家柄の人ではなかった。しかし、天性歌才に恵ま

れて書を善くしたため、大坂勤番という役目が幸いして、歌を通じ京都の公家貴紳と交わることができた。英貞は通称を弥七郎、字を龍樹、雅名を松廼舎と称し、鶴寸と号した。鶴寸文集のなかに常磐井手の完工を祝した和文と歌がある。

おくれ鶴の声

切畑と云ふ村の長のいさをしにて、此里に井手をつき、溝をひらきて、山水を通すこと一里ばかりなるを、木立茂き所々、こごしき岩根を伐とはしなどすること容易からねば、年月をわたりてその事成就したり。かくて年々この里の苗代小田にまかせける水の絶ゆることなければ、里民おのづから常磐井手となんいひける。今年三月末つかた其処に遊びける時、里長の請ふまゝになれるいわひのこゝろを

八束穂の秋のみやまさるらん

常磐の井手の末の里人

これは常磐井堤完成から数年後の文政六年（一八二三）三月、時の家老関谷長瀨以下藩士その他の男女文人二十数名が、この井堤に遊び作歌に興じたとき、大庄屋出納藤左衛門の請いによって甲斐鶴寸が詠じた和歌に、詞書

として和文をつけたものという。

ところで『鶴藩略史』には英貞（鶴寸）の歌を歎賞した公家を中山光実とし、『佐伯郷土史』には中納言外山光実としている。これは外山光実が本当のようで、中山家には光実という人物はない。外山家は日野家の分れて日野弘資の二男光頭を祖にし、光実は光頭四代の孫にあたる。なお英貞の甲斐氏は佐伯市北町（現鶴城高校表門横）にあった。

◇ 甲斐国道と各流甲斐氏

甲斐氏は全県的に分布しているが、とくに県南部の市郡に多い。市部では竹田市（約一二〇）が最多で、佐伯市（約九〇）・臼杵市（約八〇）がこれに次ぎ、郡部では大野郡（約三二〇）がもっとも多く、南海部郡（約一〇〇）・直入郡（約七〇）がこれに次いでいる。

近世における甲斐氏の出自は、歴史的にいえばおおむね日向臼杵郡（宮崎県）、しかも旧高千穂荘地域のようである。その理由については後述するが、まず知っておかねばならないのは、甲斐の語原である。甲斐は旧国名で現在の山梨県のことであるが、これは峽（かい）す

なわち山と山の峡谷を意味する。古代はここに甲斐国造（かいのくにのみやつこ）が置かれた。

姓氏家系辞書には先代旧事本紀から尾張氏族と丹波氏族の二系統の甲斐国造をあげ、国造本紀にある丹波氏族が正しいとしている。丹波氏族というのは崇神天皇の時、四道將軍として丹波から山陰方面に派遣された丹波道主命の氏族をさすもので、甲斐国造は丹波道主命の兄弟になる狭穂彦王を祖とする。すなわち狭穂彦王の裔孫塩海足尼（しほみのすくね）が景行天皇の時、始めて甲斐国造に任ぜられたのである。しかし、甲斐国造と後世の甲斐氏とは何の関係もない。

甲斐氏には嵯峨源氏渡辺氏流、清和源氏武田氏族、藤原南家流工藤氏族などがあるが、これらはいずれも氏族の祖が甲斐国司（甲斐守）になって赴任し、あるいは何かの理由で甲斐国に居住して、姓氏（苗字）として名乗ったものである。

嵯峨源氏渡辺氏流は源頼光四天王の一人である渡辺（部）源二綱から出ており、綱の子久（松浦党祖）その子滝口大夫安の後で、安の子左馬允至のとき甲斐守に補任され、甲斐国に居住して源七大夫と号した。至の子が

甲斐四郎好、その子が甲斐又四郎於である。於の孫任は清和源氏武田氏族の吉田太郎有信の子木工助時信の猶子になり彦六郎時忠と称したという。

清和源氏武田氏族は甲斐守に任ぜられた新羅三郎義光の後で武田太郎信義の孫吉田太郎有信の子時信を祖とするもので、ここで嵯峨源氏渡辺氏流の甲斐又四郎於の子彦六郎任（時忠）と重っている。なお尊卑文脈によると時信は小松と号し、木工助と称した。その子は小松太郎時朝で、甲斐彦六郎時忠の名はない。

工藤氏族の甲斐氏は工藤駿河守維景の二男景任の後といわれ、景任・資広・行景・景澄と継承するが、これは二階堂氏の一党である。

◇ 佐伯地方の甲斐氏は菊池一族か

佐伯地方をはじめ県南に多い甲斐氏は肥後の菊池氏支流で、分布の状からいえば日向甲斐氏の流れといてよい。元寇に際して、並び鷹羽の神紋を描いた旗をなびかせて奮戦した菊池次郎武房の子六郎武本が、菊池氏族甲斐氏の祖といわれている。武本がどういう縁故で甲斐国に行ったか不明であるが、武本の子あるいは孫という

武村は甲斐国都留郡に住んで甲斐又六郎（または六郎）と称し、足利尊氏に仕えた。延元元年（一三三六）二月武村の子重村は尊氏の九州落ちに従って筑前に入り、多々羅浜合戦で大友氏時の軍に属し菊池武敏と戦ったという。延元二年二月、京都を脱出して肥後に帰ってきた菊池武重は弟武敏ら一族と共に、九州宮方の中心として活動をはじめた。延元三年（一三三八）菊池方との戦に敗れた甲斐重村は日向に奔り、県（あがた）の土持氏を頼り高千穂地方に土着した。そして重村の後、数代を経て重安のときには土持氏に属する有力な土豪になった。

肥後菊池の菊池氏は能運のとき正統が断絶、弱体化して老臣どもの専横が目立った。そのころ肥後支配を狙った大友氏は阿蘇氏と結んで菊池氏に干渉した。阿蘇大宮司惟長は阿蘇郡小国から隈府に迫り、老臣どもに推されて菊池の当主になった政隆（同族為安の後）を山鹿に追い、自ら菊池武経と名乗って肥後守を僭称した。しかし武経は老臣どもと悪く永正八年（一五一一）隈府を遁れて旧領矢部（益城郡）に帰り、さきに弟惟豊に譲った大宮司職を奪い返そうとした。惟豊は惟長（武経）を受け入れず矢部から追い出したので、惟長のがれて薩摩に

いたり島津氏を頼り、永正十年矢部の岩尾城を奪回した。一方、高千穂莊鞍岡村の土豪となった甲斐重安の子重綱を経て親宣の時のことである。こんどは惟長に追われて矢部を通れた惟豊が日向に入り、鞍岡の甲斐親宣を頼った。親宣は惟豊を助けて矢部を回復し、惟長とその子大宮司惟前を八代に追った。

さて武経（惟長）が去った後の菊池氏は一族詫磨氏（菊池武澄の子武元の後）から武包を迎えて当主としたが、武包は大友義鑑に追放され、大永三年（一五二三）小代氏を頼って挙兵、大友氏と阿蘇惟豊の軍と戦ったが敗退した。この戦で阿蘇惟豊と大友氏の関係が密接になり、肥後における阿蘇氏の地位は一応安定した。やがて大友義鑑は弟重治を菊池氏に入れ、その家督を継がせた菊池義武である。

天文十年（一五四一）阿蘇氏累代の重臣である益城郡御船城主御船房行が惟豊に叛した。これは島津氏の誘いにのった房行が、大友系の惟豊に反抗したものである。惟豊は子惟将に甲斐親宣の子親直（後鑑隆と改む）をつけて御船房行を軍見坂に破り、御船城を親直に与えた。ここに於て阿蘇惟豊は阿蘇・益城・宇土の三郡に勢力を

伸ばしたが、それは奇略の勇将といわれた甲斐親直（民部大輔）の力であった。

大友義鑑は肥後支配を完成するには阿蘇氏の力を殺ぐ必要があった。そこで阿蘇惟豊にとって新参だが有力な重臣である甲斐親直に目をつけ、何かとその野心をかい、譜代の家臣に准じて義鑑の名の一字を遣り、鑑隆と名乗らせた。

天文十九年（一五五〇）二月、大友氏では二階崩れの變があり、義鑑が仆れて義鎮が家督を継いだ。天文二十三年（一五五四）義鎮はとかく大友宗家に対して反抗の態度をとる叔父菊池義武を廢し、戸次鑑連らをしてこれを直入郡木原に誘殺させた。この義武の滅亡で肥後國の大半は大友氏の勢力圏になり、僅かに相良義陽が南肥の球磨・八代兩郡にあつて、大友勢力と北上しようとする島津氏との緩衝地帯になっていた。永禄中（一五五八—一五六九）入道して宗麟と号した大友義鎮は肥後の押城として御船城の甲斐鑑隆を用いたが、宗麟にならつて入道した鑑隆は宗運と号して大友氏國衆の一人となつた。

天正六年（一五七八）十一月、日向高城の戦（耳川の戦）は大友氏の衰退を決定的にする大敗戦であつた。筑

肥の間にあつた大友方の諸城主は、北より龍造寺隆信に圧せられ、南より相良義陽を降して北上する島津勢力に迫られ、その帰属を明らかにしなければならなかつた。天正九年（一五八一）島津義久に屈服した相良義陽は、島津軍の肥後進攻にあたり先鋒として甲斐宗運の御船城を攻めることになつた。兵を進めた義陽は益城郡豊野村（下益城郡）の響ヶ原で宗運方と激突した。合戦数刻冬の日が暮れなすむころ義陽は戦死した。宗運は戦に勝つたものの、大敵の間にはさまれた小城主の運命を思うと暗澹たるものがあつた。

天正十四年十月廿三日、薩將使を佐伯に遣し降を勧む。城主佐伯惟定其の士臣と会して曰く、

我年少未だ事に通ぜず、然も我が父、我が先人及び我伯父、皆薩の為に死せり。其仇報せざるべからず、况や豊府に叛すべけんや。媾和を絶つか或は其使を斬らんか。汝等宜しく意見を陳ぶべし。（媾は講と惟定の母遽に出でて曰く、 同じ）

児の言是なり、敵若し来攻め衆寡敵せずんば児をして自ら屠腹せしめ、我亦自殺せんのみ、汝等よく城を枕にして死すべきなり。豈他心あるべけんやと。

群臣皆然りと同じて、遂に薩使十九人を番匠洲に斬る。惟定時に年十八なり。(以上豊後全史より)

去る程に番匠洲には此者共を討たんため、廿余人忍び居て今や今やと待居たり。兼て合図のことなりければ、帯刀(杉谷)大音声を揚げ、爰は危き岐路なるに松明の持ぎまこそ悪しけれと、怒りて馬より飛て下り、大松明に火を移し、前後左右を輝かす。其時伏兵同時に起て二十人の者を十九人まで討捕ける。中にも甲斐宮内と云ける者、番匠洲に飛入りけるが、水練の達者なるにや有けん、危き命を扶り難なく逃げ去り失にけり。

(以上豊薩軍記より)

これは天正十四年(一五八六)十月、島津家久軍の豊後侵攻にあたり、家久は柵牟礼城主佐伯惟定を降すため勸降使僧玄西堂以下十九人を派遣したが、惟定は降伏を承知せず、玄西堂ら二十人を番匠洲に誘殺、なかの一人甲斐宮内なる者を取り逃がした。という豊薩戦にからまる史話である。

この甲斐宮内なる人物が、同年十一月、日向三河内に城砦を築いて佐伯の辺境を脅かしたので、十二月下旬惟定は高畑伊豫守らに命じて三河内城を攻撃させた。甲斐

宮内(宮内少輔・実名不明)は七百余人の城兵を指揮して防いだが、佐伯方の猛威に屈し城砦を棄てて逃走した。甲斐宮内は日向三河内の土豪らしいが、軍記類の記述から推察すると土持氏に属した武士で、高千穂甲斐氏の流れであろう。現在も三河内地域には甲斐氏が多く、かつて私は市尾内付近で甲斐某と刻まれた教基の古墓(土豪らしい)を見たことがある。

北日向における甲斐姓の分布は旧臼杵郡(延岡市及び東西臼杵郡)全般といつてよいが、そのすべてが菊池氏族甲斐氏とはかぎらない。しかし、多分に肥後の御船城主甲斐氏を宗とする一族の末裔といえるのではなからうか。

天正十五年(一五八七)佐々成政が肥後に封ぜられたとき、彼の苛政に反対する国衆一揆があった。その頭目の一人に甲斐宗立があるが、この宗立は甲斐宗運の嫡子相模守親秀のことという。もちろん一揆衆は処刑されたが類族全部が殺されたとはかぎらない。なかには肥後の山奥、日向の山中、あるいは阿蘇を越えて豊後地方へ、逃れて行ったものもあつたであろう。

甲斐氏についてはこれくらいにして、類似姓について

見よう。大野郡三重町には甲斐田氏が十家ばかりある。この甲斐田氏は甲斐氏同族ではなく、大神姓阿南氏族で阿南惟隆の子基泰（次郎）を祖にしている。つまり地名を負うた氏族（姓氏）である。また緒方町には甲斐崎氏があるが、これは甲斐氏から出た新姓ではなからうか。

◇ 戸坂（戸高）曲浦のいっつ

次は戸高氏であるが、戸高は戸坂に通じ、また富高に通じる。（もっとも富高は「とみたか」と訓む場合が多いようである）

増村隆也著『佐伯郷土史』に佐伯の国学者戸坂曲浦の記事がある。

戸坂曲浦は堅田（現青山地区黒沢）の馬鎮神社の社掌で、国学を好み二十余年間諸国を遍歴した。ある時某所に宿泊したとき、その家の主人が「今夜は京都の玉田（安芸）先生を招いて神典の講義を聞くことになっているから、貴下も聴聞されたらよからう」といった。その夜曲浦は人々の末席に坐っていると、玉田は曲浦の顔を見て大いに驚き、自らの席を下って「多年、先生にお目にかかりませんでした、今夜この席でお会

いできましたことは何という幸せでありましょう」と曲浦を上座に招じて「この方は神典研鑽に諸国を遍歴しておられる戸坂曲浦先生で斯道の先学である」と紹介したので、座にあった人々は肅然と容を改めたという。曲浦はのち江戸白山に塾を開いたが、文政三年十一月、下野国黒羽一万八千石大関土佐守増業に召抱えられた。

増村氏によって戸坂曲浦の名は佐伯郷土史の上に残ったが、曲浦という号のほか通称も実名もわからず、事歴も明かでない。ただ大関増業の事歴に

大関増業・土佐守、下野国黒羽藩主（一万八千石）寛政中伊豫大洲藩主加藤氏の子として生れ、文化八年（一八一—）黒羽藩主大関増陽の養子となった。若くして学業を好み、つとに和漢の書誌に通じたが、自ら括囊^{のうさい}と号してその身を警めた。文政三年（一八二〇）十一月、豊後の国学者戸高曲浦を招聘して、黒羽本「日本紀」を校刻、文政五年これを朝廷に献上した。文政七年（一八二四）養父増陽の実子増儀に家督を譲り退隠した。

とあって、いささか曲浦の逸事をうかがうことができる。

曲浦の戸坂（戸高）家の縁族である岩田正城氏は、かつて佐伯史談誌上で、大略次のように述べている。

曲浦は黒沢の馬鎮神社の社家の生れで、同神社の社掌をしてきたが、国学を好んで師を求め諸国を遍歴した。

江戸白山に塾を開いたが、文政四年下野の黒羽藩大関家に仕えたというのがその後の消息はわからない。戸坂曲浦と称しているが馬鎮社の社家は戸高氏、それで私は足田泉翁に戸高姓と戸坂姓について尋ねたところ、昔は訓みが類似している場合通じて使ったもので、戸高と戸坂は同姓といつてよいといわれていた。

さて寛保年間の「御領分中寺社記」には、黒沢村の馬鎮大將軍社、同村伏木川鶴の天神社、同村市野々の天神社、同村一ノ井鶴の天神社は黒沢村戸高丹波勤め」と記してある。ところが寛政十年（一七九八・寛保より五十五年後）七月、堅田郷八幡宮神主足田和泉守平盛征が佐伯藩庁に差出した「御神名数書付（覚）」のなかに、次のような記録がある。

五具権現 黒沢村、馬鎮宮 同所

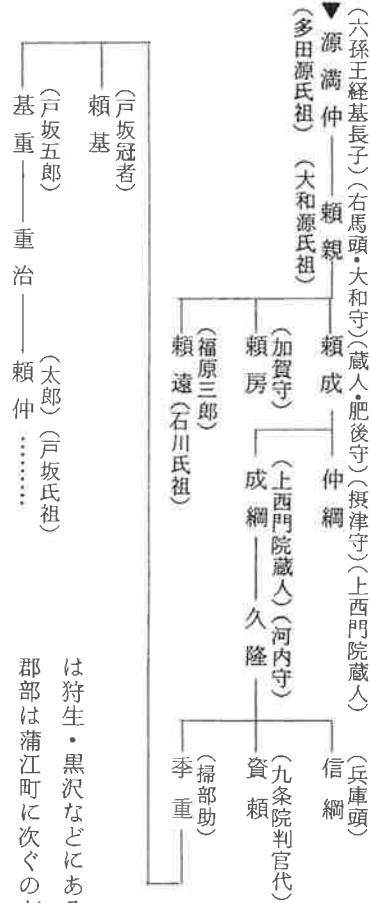
此貳ヶ所は先年其村専右衛門と申者宮守を致し居し処、終に其者に奪はれ候得共、唯今に至り而も先代

よりの宮帳面所持仕候故、今度も先規の通り書記し差上げ仕候。則ち専右衛（一字欠）と申者宮守の時節に、私先祖に神文一札等を差出し、唯今迄所持仕り居り候。

これは祝職の権限に対する申述べ状で、足田和泉家が預っていた黒沢の五具権現・馬鎮宮二社の祝職を神人（宮守）の専右衛門に奪われた次第を述べたものである。

『鶴藩略史』や『御領分中寺社記』の記載によると、黒沢村の祝職は戸高丹波で、少なくとも貞享・元禄以降、享保・寛保ごろまでは戸高丹波が勤めており、何代目かの戸高丹波が不在になったため、汐月の足田和泉が祝職を預ったようだ。その時期は「御神名数書付」を提出した寛政十年から逆算して五十余年（寛保年間）前までの間で、足田和泉家は盛征の先代盛令の時という。一方戸高曲浦は文政三年に黒羽藩に仕えたが、彼はそれ以前二十数年間を国学研鑽のため諸国遍歴の旅におくっている。文政三年から二十数年前といえば寛政年間で、幕府は松平定信の執政時代である。こうした点を考えると、曲浦は天明から寛政前期の戸高丹波で、曲浦の出奔によって祝職を足田和泉（先代）が預り、宮守専右衛門が登場し

〔清和源氏頼親流戸坂氏系図〕



たこととなる。

それでは曲浦は何故に戸高を戸坂に書き変えたのだらう。私はこの解答に、曲浦が国学者であったことをあげたい。戸高氏は地方的な名字でその系統が不詳であるが、戸坂氏ははっきりした清和源氏である。曲浦はいわば故郷に容れられない人物である。彼が戸高氏をあえて戸坂氏と称した理由はここにあるといっべてよい。

◇ 戸高、富高氏の名字の地は？

さて、佐伯地方には戸高姓は多いが、戸坂姓は少なく、ほとんどが佐伯市内(鶴岡・青山地区)である。戸高姓がまとまって多いのは蒲江町で、とくに畑野浦・森崎・越田尾などに多い。佐伯市の場合、聚落的には狩生・黒沢などにあるが、全域的に散在している状態。郡部は蒲江町に次ぐのが宇目町、ほかに本匠・直川両村にかなりある。

畑野浦の伝承によると、戸高氏は長曾我部氏の残党、富高氏は菊池氏の遺臣裔、塩月氏は平氏落人の末流といふ。もっともこの伝承を裏付ける記録・文書の類は全くないが、このような伝承が形成されるには、それぞれの時代に漂流(落人)による何かがあったのであろう。名字(苗字)は地名から起ったというのは常識であるが、畑野浦の戸高氏の場合、長曾我部氏の族党ということになると、一応長曾我部氏の支族を調べて見なければならぬ。しかし、私の調べた限りではその中に戸高氏

はなかった。(長曾我部氏庶流の代表的なものは、江村・久礼田・広井・中島・野田・大黒・上村・中野・久富・光富・馬場・穴崎・西和田・蒲原・益田・国沢・比江山・戸波の十八氏。ほかに長曾我部元親が滅ぼした土佐の豪族、吉良・本山・大平・安芸・香曾我部・津野各氏があるが、いずれも元親の子弟が養子になって家を継いでいる。)

十一月十七日(天正十四年)、命を奉じて馳せ集る因尾の士は、柳井左馬助、柳井外記、柳井平兵衛、柳井兵庫、三代勘解由、柳井喜左衛門、柳井弥右衛門、吉良舍人助、杉谷兵部丞、杉谷源四郎、稗田右馬助、稗田嘉右衛門、柳井雅楽助等にして、此等の将士を先手として因尾村伝巖の下、三竈江大明神の前に流れたる一川の南北岸、小板屋等の所々に兵を潜ませ、また野にも山にも遠見を置きて、敵の通るを待ちいたるに、十八日日州^{あがた}の住人戸高将監といひける者を大将として騎士三十六人に歩卒七八十人を随へ来りけるを、待ち設けたる因尾の諸士、一斉に起ちて討つてかかる(略)勢に乗りて討つほどに、大将戸高将監を柳井左馬助討取りければ、残る三十六騎の者共および雑兵にい

たるまで皆盡く討たれたり。(大友興廢記より)

これは天正十四年十一月、堅田合戦に大敗した日州勢が島津家久の本隊と合し、府内攻略に向うことになり、宇目境に集結して因尾路から野津方面に転進しようとして、土持親信配下の侍大将戸高将監が百余人の士卒をひきいて因尾村に出たところを、因尾柳井党の面々に待伏せされて全滅した史伝である。

問題は日州^{あがた}の住人戸高将監の話ではなく、土持氏家中、若くは薩軍(島津勢)に協力した土豪戸高氏についてである。一般に県(あがた)は延岡地方の旧称と理解されているが、県城は宮崎郡(那珂郡)の古城にもある。この県城は現在の日南市(旧吾田村)戸高の鼓ヶ岳にあった城で、創築の年代も城主名もわからないが、所在地が字戸高で、日向各地の戸高氏の名字の地になっている。『宇佐大鏡』によると、日向国における宇佐宮弥勒寺領荘園の一つに富高荘がある。このあたり(現日向市地域)は土持氏が荘官をつとめた地域だから、富高荘(富田荘ともいう)にある塩見城(現日向市大字塩見)・日知屋城(同市日知屋)等は土持氏が創築したものである。もっとも鎌倉時代以後は門川伊東氏の領有するとこ

ろになった。

富高が戸高の読み替えであることは疑う余地はないが、戸高氏と富高氏が同系同族であるかどうかには疑問が残る。それは畑野浦の伝承に戸高氏は長曾我部氏の残党、富高氏は菊池氏の遺臣と伝えられるばかりではなく、戸高の地名は日南市（旧南那珂郡）、富高の地名は日向市（旧東臼杵郡）であるからである。なお『日向纂記』や『宮崎軍記』によると伊東氏の家臣に富高次郎右衛門尉があり、高橋元種（県の領主）の重臣で宮崎池内城を守

った権藤平左衛門種盛配下の土に富高主馬助がある。ともに富高荘出身のようである。

富高氏と菊池氏の関連については解明できないが、十四世紀末における荘園制の崩壊で、富高荘の荘民は郷村の領主に把握されて郷民となったが、いつか自治的な共同生活を営み、集団的行動をとることができるようになり、土持、伊東両氏相剋の地である富高荘を去って、佐伯地方海岸部に移住した。それが佐伯地方の富高姓の起りといえるのではなからうか。

資料紹介

蛇崎村庄屋文書

「村差出明細帳」について (三)

橋 本 和 雄

(会員・佐伯市蟹田)

一、はじめに

今回は蛇崎村庄屋文書その三として「村差出明細帳」

の紹介をしていきたい。この「村差出明細帳」は三冊残されており、年代順では享保五年（一七二〇年）、文化二年（一八〇五年）、天保三年（一八三二年）である。